

知られざる
三重にまつわる
文学・美術を
紹介します。



初期の作品「D坂の殺人事件」、「二銭銅貨」、「パノラマ島奇談」。(名張市立図書館蔵)

CHRONICLE OF MIE VOL.8

【文学編】

尾西康充 おにしやすみつ
人文学部・文化学科教授
専門は日本近代文学

三重ゆかりの
推理小説家
江戸川乱歩。
日本を代表する推理小説家
江戸川乱歩は、名張市で生まれた。
地元の代議士に
就職を世話してもらったり
鳥羽出身の夫人と結婚するなど、
郷里とのつながりは生涯続いた。

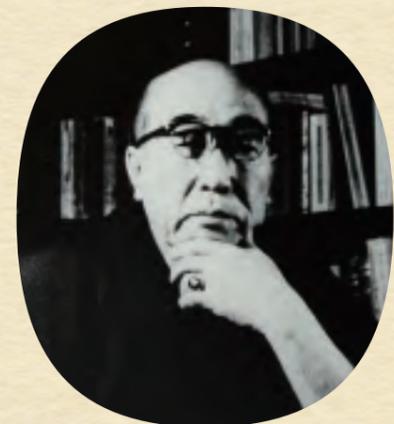
江戸川乱歩の人気シリーズ『怪人二十面相』は講談社の雑誌『少年倶楽部』(昭和11年/1936)正月号からスタートした。今や推理小説の古典ともいべき『怪人二十面相』シリーズは、企画段階では『怪盗二十面相』というタイトルであったのだが、当時の少年雑誌倫理既定に従えば、「盗」の字が風俗紊乱になる恐れがあるので、タイトルを修正したとされる。明智小五郎や小林少年の少年探偵団が作品のなかで活躍していた時代は、厳しい出版雑誌検閲の時代であった。

日本を代表する推理小説家の江戸川乱歩の本名は平井太郎、名賀郡名張町(名張市)に明治27年(1894)10月21日に生まれた。本籍は津市、祖父は加判奉行を務めた藤堂藩士であった。父の繁男は関西法律学校(現在の関西大学)を卒業後、名賀郡の郡役所書記を務めていた。その後名古屋最初の弁理士として活躍、奥田正香商店支配人や名古屋商業会議所法律顧問などを歴任したが、南伊勢町に開業した平井商店が倒産してからは浮沈の激しい人生を送った。

乱歩が探偵小説に興味を持ったのは、母きくの影響であった。きくは、高田本山専修寺の皇族出身法主の夫人に仕える小間使いであった。暇のあるときには、日本における探偵小説家の先蹤黒岩涙香の探偵本を貸本屋から借りてきて読んでいた。乱歩が小学3年生のとき、流行作家の菊池幽芳の翻案「秘中の秘」を母

から読み聞かせてもらい、探偵小説の面白さに興味を抱いた。

社会の闇と人間の心の闇——探偵小説が物語の素材とするのは、犯罪の背景にある人間の暗黒面である。敗戦後、乱歩は「我々日本の探偵作家は従来ポー、ドイル直系の推理小説から離れすぎている」と語った。乱歩によれば、「俳諧や墨絵の直観主義を決しておろそかに思うものではなかった」が、「一般に小説は俳文や日記ではないのだから、西洋風にもっと構



江戸川乱歩 えどがわらんぽ

推理小説家
1894年～1965年
明治27年(1894)10月21日～昭和40年(1965)7月28日。三重県名張市出身。日本を代表する推理小説家。小説を創作するだけでなく、英米の本格ミステリを翻訳紹介し、みづからも評論の筆をふるった。

成と論理のある文学が目ざされなくてはならない。ことに探偵小説においてそれが痛感せられる」と主張した(『推理小説の黎明』、『東京タイムズ』1946年9月28日)。

「構成と論理」を重視する乱歩の作風は、初期の『二銭銅貨』(大正12年/1923)や『D坂の殺人事件』(大正14年/1925)にもみられる。早稲田大学政経学部を卒業した乱歩は、伊賀の川崎克代議士の紹介で大阪の貿易商社に住み込みで働くが1年足らずで退社、当時財閥の一角を担っていた神戸鈴木商店の経営する三重県鳥羽造船所電機部に勤めたり、東京の団子坂(D坂というタイトルの由来)で古書店の経営をしたりと職業を転々とした。乱歩が鳥羽に住んでいたのは大正6年(1917)11月から大正8年(1919)1月まで——坂手島出身の村上隆子と知り合ったのは、そのときであった。島に一軒しかない雑貨商を生家が営んでいた隆子は、亀山の三重県立女子師範学校を卒業した後、坂手尋常小学校に勤めていた。造船所の同僚たちと「鳥羽お伽会」を結成した乱歩は、教室を借りようとして小学校に赴いたところ職員室で隆子と出会った。乱歩によれば「そのころの隆子は田舎にしてはととのった理知的な顔をしていし、笑顔もよかった。進歩的な考えも持っているようにも見えた」という(『わが夢と真実』、昭和32年/1957、東京創元社)。二人が結婚したのは大正8年(1919)、古書販売に行き詰まった乱歩がラーメン屋を手掛けた頃であった。

乱歩と郷里とのつながりは続き、昭和30年(1955)11月3日に生誕碑除幕式が催された。川崎克の二男、秀二代議士の選挙応援にもかけつける一幕もあった。



【左】イラストで描かれた『怪人二十面相』の表紙。(名張市立図書館蔵)

【中】『少年探偵』シリーズ(発行者 神吉晴夫)と『江戸川乱歩全集』(発行者 和田欣之介)。(三重県立図書館蔵)

【右】江戸川乱歩生誕地碑。かつて乱歩の生家があった跡地に、高さ約1.9mの石碑が建てられた。